

■ 国際石油開発帝石株式会社 (1605)
2019年12月期第2四半期 決算説明会 質疑応答

日付 : 2019年11月7日(木)
出席者 : 87名
主な質疑応答 :

- Q1 : イクシス LNG プロジェクト (以下、イクシス) について、出荷 LNG カーゴ数が増加している中、今期第2四半期 (以下、2Q) のイクシス利益貢献の 200 億円強は、やや物足りない印象。また、今期第3四半期 (以下、3Q) のイクシスの利益貢献は 250 億円程度の見通しとのことで、油価約 60 ドル水準であれば、来期もイクシスの利益貢献は四半期ベースで 200~250 億円程度と見込んでよいのか。
- A1 : イクシスの利益貢献実績について、例えば、油価の変動、LNG 船によってサイズが異なること、LNG スポット販売と長期契約による販売の構成差、さらにイクシスは LNG だけではなくコンデンセート・LPG という生産物もあるため、一概に LNG カーゴ数だけで利益の変動を説明できるわけではない。また、今期 3Q のイクシスの利益貢献見通し約 250 億円を年間換算すれば約 1,000 億円となり、従来から申し上げている 2022 年度のイクシスの利益貢献見通し 1,000 億円超 (油価 60 ドル、為替 110 円前提) に近い段階となってきた。プラトー生産時に年間 120 カーゴ程度の LNG 出荷見通しというベンチマークで見れば、直近数ヶ月は月 10 カーゴの LNG を出荷しており、プラトーに近づきつつある状況だが、施設の状態等も含め、今後安定して生産を継続できるかを見ているところ。
- Q2 : 来年度以降の制度会計ベースのフリー・キャッシュフロー (以下、FCF) 見通しについて。
- A2 : イクシス下流会社を含む FCF は、今期は黒字化の見通しであり、暫くは黒字が続く見込み。但し、借入金の元本返済まで加味したキャッシュフローは引き続き厳しい。また、先の話ではあるが、アバディ LNG プロジェクト (以下、アバディ) への投資が本格化する段階になると FCF はタイトになり、アバディの生産開始直前辺りに黒字化するようなイメージ。なお、イクシス下流事業会社を含まない制度会計上の FCF とは必ずしも一致しない。
- Q3 : 期末配当を増配とした背景について。配当性向 39%~40%等の水準を意識したのか。
- A3 : 前期 (2019年3月期) 12ヶ月間の純利益は 961 億円であり、今期 (2019年12月期) 9ヶ月間で 1,000 億円の見通し。油価は昨年から 10 ドル程度下落しており、事業環境は良いとは言えないが、イクシスの順調な進捗をベースとして当社の稼ぐ力がついてきたと考えており、株主の皆さまのご支援に応えるべく、今回 3 円の増配とした。なお、配当性向 39%~40%等の数値を念頭に置いているわけではないが、昨年の配当性向は 36.5%、今期の配当性向見通しは 39.4%である。
- Q4 : 来期の配当の考え方について。今期 9ヶ月間で 27 円だが、中期経営計画 (以下、中計) の安定配当という方針を踏まえると、来期 12ヶ月で 36 円となるのか。
- A4 : 今期の年間配当予想 27 円は、9ヶ月間という期間ではなく、今期の利益水準見通し (1,000 億円) を踏まえたもの。イクシスが引き続き順調に稼働すれば、来期の

利益水準もある程度期待できるものと考えており、油価・為替等を含めた事業環境を総合的に勘案しながら、来期の配当につき検討していく。

Q5：ROE 向上を目指していく中での、新規投資の採算性の考え方について。

A5：IRR2 桁%以上が目安。油価が長期的に上昇しない状況においても、十分な利益が見込める点が肝要であり、ROE に関する市場関係者の見方も十分認識。

Q6：中計の最終年度（2022 年度）は、イクシスの利益貢献は 1,000 億円超との理解だが、当初はプラトー生産到達まで 2～3 年程度と考えられていた中、LNG 生産開始から約 1 年間のランプアップが非常に好調である点を踏まえると、利益貢献 1,000 億円超は上振れる可能性があるのか。また、中計期間中のキャッシュフローは増大することになるのか。

A6：当初の想定より早期にランプアップした場合であっても、プラトー生産時の利益貢献水準が上振れるわけではない。なお、例えば中計 5 年間のキャッシュフローについて、イクシスの足元のランプアップは非常に順調である一方、中計における想定よりイクシスの生産開始が数ヶ月遅延した事情もある。

Q7：イクシス拡張・周辺鉱区に関し、LNG トレイン増設余地とそのタイミングについて

A7：追加 4 トレイン分の土地を確保済みであるが、まずはイクシスの安定生産の維持とコスト削減に向けた取り組みが優先される。また、拡張には大規模な埋蔵量が必要であるため、タイミングを含め慎重に検討していく。

Q8：イクシスは長期契約による LNG 販売が主ではあるものの、スポット価格の下落はイクシスからの利益貢献にどう影響しているか。

A8：イクシスの LNG 年産約 840 万トンが長期契約によってカバーされている。今期もスポットカーゴは含まれているが、影響は限定的。

Q9：中計の最終年度（2022 年度）における油価センシティブリティは、1 ドル/バレル変動当たり年間 80 億円の当期利益への影響とされているが、イクシスがほぼプラトーレベルの生産水準まで到達しているように見える中、今期下期（3Q）のセンシティブリティに変更はないか。また、来期のセンシティブリティの考え方は。

A9：今期期初にお示しした油価センシティブリティから変更はない（3Q の油価センシティブリティ：7 億円）。今期は油価の遅効性を反映し、より正確にお伝えすべく、四半期毎の油価センシティブリティを開示している。今後の販売量増加等により油価センシティブリティも増加する見込みである。なお、中計の最終年度における油価センシティブリティ 80 億円は、油価の遅行性を反映していない試算。

以上

注意事項：

本書に記載される情報は、当社の計画と見通しを反映した、将来予想に関する記述に該当する情報を含んでおります。かかる将来予想に関する情報は、現在入手可能な情報に鑑みてなされた当社の仮定および判断に基づくものであり、これには既知または未知のリスク、不確実性およびその他の要因が内在しております。かかるリスク、不確実性およびその他の要因は、かかる将来予想に関する情報に明示的

または黙示的に示される当社の将来における業績、経営結果、財務内容に関してこれらと大幅に異なる結果をもたらす可能性があります。かかるリスク、不確実性およびその他の要因には下記のものが含まれますが、これらに限られるものではありません。

- 原油および天然ガスの価格変動及び需要の変化
- 為替レートの変動
- 探鉱・開発・生産に関連するコストまたはその他の支出の変化

本書に掲載される情報（将来予想に関する情報を含む）を、その掲載日後において、更新または修正して公表する義務を負うものではありません。